

うとうとした眠りから目が覚めた
それは謎が解けたような眠りだった
いつもは小鳥の止まる木に、おおきな鳩がいた
ちょうど、家の中から見て、窓の真ん中の位置に

なんだかびっくりしていたら
はとは、そのまま木の前の小川にじゃぶっと入っていった

鳥が入っていったのはもうひとつの世界だった
目には見えない世界
そこは生命と不可思議にあふれている
私は鳩に導かれる
何もこわくないみたい
私も不思議な生き物

あのふさふさのきれいな木は何？
風に黄金に輝いている
近づいてみると、それは、角の生えた生き物のしっぽだった
その生き物は、それは綺麗な整った毛並みで、さわってみたいほど艶やかだった

上のほうを見ている 気高く少し首を傾けながら 上の方を
そうして、まばたきをゆっくりした
私はおんなじように上の方を見て
目をつぶった
深い静けさの中、尊い音が様々に一つ一つのきらめきとして聴こえる
あれは、花の花びらが動く音だろうか

こんどは鳥のようなろばのような、どこか妖精のような生き物が
耳を動かしたのが聴こえた
ぱたぱたぱた この動物も何かの音をきいているようなのだ

私は一緒にきく

水と空気の音だ
これは空かな 海かな 湖かな

さらさらさら しーん さら しーん
ちよろちよろ 小さな生き物が泳いでいる 鳥かなイルカかな
ちいさくともゆっくり静かに ゆうゆうとした姿勢で進むので
どこか神聖なのだ
神さまかもしれない

私は水を口にふくむ
小さな一口の水は、私のまぶたから指先まで輝かせる
そんなうつくしい私を 皆がみた
皆、鋭い生命の生きた目をして、同時にやさしい深い目をしている
私は私の、生命の生きた深い目で返し
もう一口水を口にくわえ、手をゆすぐ
この目は東慶寺でもみたのだ 水辺の観音

私の生きる活力は、ずっと私の中にある
私ほうたいはじめる
聖なるうたを
私の土台は麗しい緑の草にすくっと立ちながら
わたしの、透明で白く輝く繊細な花のような模様をしたつばさが、しずかにひらく
皆もつばさを持っていて、それぞれがうつくしくひらく
りんごの木をつばさは、さるのつばさと重なり合って
鈴らんのような音をすこし鳴らす
そうしてうつくしい静けさがやってくる

愛で満ちている
わたしは、んーと、からだにうたう
心の方へ静かにひらいた

小さなぞうのような 白いへびのような生き物が
鼻を水辺の方へ 空の方へかかげて
ふわーと言う

木はゆらゆらっとゆれ
安心して大地に身をまかせる

小さなうさぎは天使のように透きとおる音を体にひびかせる
やさしく (んむー)

白い大きな象は、少し足をもぞもぞとして
ひくい、地の下までひびくようなひくい音を
鼻の上から、少しずつ出す (うんー)
大きな耳は、私、木、うさぎの音を聴いている

そうして花もみんなも、ちいさなそれぞれの音を、自分たちにハミングする

しだいにしずかになり
また水が空気がちょろちょろ
しーん とし、
花が少し音をきかせ
活力と愛と平和がみなぎっている

私の夢と、初夏の桜の木と、鳩と、伊藤若冲作 鳥獣花木図屏風 をもとに 中村愛音